

福島乳幼児妊産婦支援プロジェクトの スタッフ業務を振り返って

宇都宮大学国際学部 匂坂宏枝

はじめに

2011年4月より活動を始めた福島乳幼児妊産婦支援プロジェクト（FSP）は、2015年4月「福島原発震災フォーラム」に名称変更しプロジェクトとしてはその組織が解消された。5名の教員が、本来の研究を脇に置いてまでプロジェクト活動に没頭するなかで、その多忙さ故に活動を補助するスタッフが必要であった。筆者は2012年4月から2015年3月までの3年間に及び、プロジェクトスタッフとして勤務をした。

当初、大学の一組織としてのFSPでは、その主力メンバーの教員と当事者との交流からのみ活動や調査内容が語られるものと思っていた。しかし、教員でない立場のスタッフだからこそ見えたことについて文章に起こしてほしいと、メンバーの教員より依頼をいただき、やや戸惑いながらもお引き受けした。本稿では、FSPが大学という研究、教育組織であることを超えて、原発震災にどう向き合い活動したのかをスタッフ業務の側面から記し、同時に、この立ち位置から見えた原発震災に纏わる問題と所感も述べる。

スタッフ業務の内容

I. 事務補佐業務

事務補佐の内容は、FnnnP 栃木による訪問支援の事務処理、報告会開催準備、報告書・資料集等刊行物の編集、経理処理等が主な業務であった。

スタッフの人件費については、プロジェクトの基盤資金が無かったため、教員たちが都度獲

得した複数のプロジェクト外資金から充当されていた。獲得した複数の助成金のうち、スタッフ人件費をご負担いただいた資金は下の通りである。4年間FSPとフォーラムの業務に従事し続けられたのも関係機関のご援助によるものと感謝申し上げる。

- ・国立大学協会「平成24年度震災復興・日本再生支援事業」
- ・国際ソロプチミスト宇都宮「東日本大震災復興支援プロジェクト」（平成25年度）
- ・科学研究費助成事業「原発震災後の人間の安全保障の再検討―北関東の被災者実態調査に基づく学際的考察―」（2013年度～2014年度）
- ・「東日本大震災に係る災害復興再生に向けた 宇都宮大学学長支援プロジェクト」（平成25、26年度）
- ・宇都宮大学女性研究者キャリア支援室 研究補助員配置制度（平成27年度）

<所感>

FSPのようなプロジェクト活動は、個別の活動費ばかりでなく日常的に事務局を運営するための基盤となる資金が必要である。活動費として獲得した助成金は単年度で終了するものが多く、次年度のプロジェクト活動の継続やスタッフの雇用については、毎年度末の不安材料であった。また、獲得した資金の管理も業務の一つであったが、助成金獲得のための申請書作成や助成期間終了後の報告書の作成など、煩雑な事務処理に時間を要した上、運用についても厳しい制約がある資金が多かった。原発震災の場合、専門家がない上に急を要する事案が多

II 活動報告

く、かつ単年度で収束できる問題ばかりではなかった。これに対応するためにも、柔軟な運用と複数年度に渡って資金提供が可能な財源が必要だと考える。

II. 研究支援業務

FSP では、福島県内乳幼児家庭、栃木県内避難者、栃木県北地域被災者を対象に6回のアンケートを実施し、その結果については報告会等を開催して社会発信している。アンケート結果については、多文化公共圏センター HP や FSP 報告書、アンケート資料集で公表してきた。また、2014 年度には個々の避難者の声を残すための証言集を作成し、著者はその編集に関わった。

<所感>

アンケートは、質問項目の設定、質問用紙の作成、質問用紙の発送と回収、回答の集計、報告資料の作成と、時間を要する業務であったが、これら全ての過程に従事した。集計については、専門知識がなかったためプロジェクトメンバー以外の先生方にもご指導をいただき、参考書を手に取りながらの作業であったが、大変勉強になった。また、原発震災の研究とは直結しないが、避難者の話しをまとめた証言集の編集にも携わらせていただいた。避難者から直接聞いたお話を思い出すと今でも胸が苦しくなるが、その避難に対する苦しい想いを少しばかりではあるが、共有できたのではないだろうか。証言いただいた方々は普段の生活では避難のことをあまり語らないそうだが、FSP のメンバーとなれば話すことができるという関係を作り出したことも、証言集作成の効果の一つだったと考える。

III. 学生との協働

2011 年 4 月、阪本公美子准教授を代表にボランティア団体の FnnnP 栃木が立ち上がり、

同時に学生ボランティア団体の FnnnP Jr. が活動を開始した。FnnnP 栃木、FnnnP Jr. と FSP とが協働した活動内容については、FSP 報告書や FnnnP のブログ (<http://fukushimaneeds.blog50.fc2.com/blog-category-6.html>) 上で報告しているので、参照されたい。

<所感>

当初活動を開始した学生は福島県出身の学生が多かったが、年を経るごとに他県出身の学生が増えてきた。ボランティア活動の内容も交流会開催等避難者と直接顔を合わす支援から、現在では、証言集を用いて原発避難を社会発信する支援へと変化している。

メンバーの学生が開催しているランチミーティングには筆者もできる限り出席している。時折おしゃべりしする学生との話題は、恋愛や就職や友人関係の悩みなど普通の学生と変わらないものももちろんある。しかし、彼らの何人かは、原発避難のこと、福島県にいる家族や友人への想い、原発を保持する社会への怒り、自分の将来や健康の不安などを涙ながらに訴えてきた。とくに福島県出身の学生は、語らずとも複雑な想いを抱えていると感じる。受け取った学生の言葉は筆者の教科書となり、学生各々の立場で原発事故に向き合う姿はスタッフ業務の励みでもあった。彼らの成長と活躍を心から願っている。

IV. 支援団体・当事者団体との交流

県内の支援団体や当事者団体を通じて、情報交換や交流会参加の機会をいただいた。FSP で開催した報告会やシンポジウムなどにも、多くの関係者からご協力、ご出席をいただいた。

<所感>

FSP でそのスタッフとして避難者に接する際、常に心がけていたことは「話を聞く」ということであった。その上で最も困難に感じたのは、避難者支援について何のノウハウも持って

いなかったこと、またプロジェクトとして支援者ケアの体制がなかったことである。恐らく、同様の問題を抱えていた支援団体は全国でも多かったのではないだろうか。

このような状況の中、支援者や避難者との会話上で、最も有効に働いたのは私が「母親」という立場であったことだ。子どもの健康や安全を優先するために、苦難と思える中に身を投じる選択をすること、しかしその選択に迷いと不安が常に付きまとうことは、原発避難に限らずとも親として共感できる部分が多かった。そして同時に、交流会や証言集の編集で出会った方々の、苦境の中でも前を向こうとする強さを目の当たりにし、その姿に励まされてきた。FSPのスタッフは支援者の立場かもしれないが、実は避難者の皆さんに励まされ助けられて交流してきたと思っている。協働してくださった支援団体の皆さまにも、避難者の皆さまにも感謝を申し上げたい。

V. プロジェクトに関する刊行物の公表

FSPでは、プロジェクトメンバーの教員や協力者によって実施されたアンケート集計やシンポジウムの報告書、資料集等を以下のように刊行してきた。筆者の中心業務の一つはこれらの内、いくつかの刊行物の編集を補助することであった。刊行物の中には、多文化公共圏センターのHP (<http://cmps.utsunomiya-u.ac.jp/>) や宇都宮大学附属図書館のリポジトリ (<http://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/>) より閲覧できるものもあるが、在庫のある刊行物については、学内外の希望者へ提供も可能である。

- ①『福島県内の未就学家族を対象とする原発事故における「避難」に関する合同アンケート調査』2012年
- ②『福島乳幼児・妊産婦ニーズ対応プロジェクト(FnnnP)新潟チーム 2011年度活動報告書』2012年

- ③『ベラルーシから学ぶ私たちの未来』2012年
- ④『福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト(FSP)報告書 2011年4月～2013年2月』2013年
- ⑤『2013年北関東地域の被災者アンケート調査 福島県からの避難者アンケート調査 資料集』2014年
- ⑥『福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト(FSP)報告書 2013年4月～2014年2月』2014年
- ⑦ブックレット 高橋若菜・田口卓臣『お母さんを支えつづきたいー原発避難と新潟の地域社会ー』本の泉社、2014年、(定価600円)
- ⑧『証言集 原発避難を語る一福島県から栃木県への避難の記録』2015年
- ⑨論文集『原発震災後の人間の安全保障の再検討ー北関東の被災者実態調査に基づく学際的考察ー～震災直後から今日まで～』2015年

<所感>

FSPはアンケートによる実態調査から、報告会・シンポジウムの開催、さらには支援団体や当事者団体との協働まで活動が及んでいる、他大学に類を見ない大学プロジェクトだということが、刊行物からも分かる。これらに携わりながらも同時に、国内外の災害に関わる人権問題等多くのことを学ばせていただいた。以上の刊行物は国立国会図書館を初め、防災関連の図書館等から問い合わせがあり納本をした。

おわりに

2011年3月、「専業主婦」の傍ら所属していた宇都宮大学大学院を修了する間際に東日本震災が発生し、その1年後に筆者はFSPのスタッフとなった。十数年に及ぶ「専業主婦」だった女性が仕事復帰し、周囲にご迷惑をおかけしながらも様々な立場の方に関わり続けられたの

II 活動報告

は、FSPメンバーの寛容さのおかげだと思っている。

4年間を振り返ると、福島原発事故は日本だけでなく世界の「歴史」に残さなければならない災害であると強く思う。FSPの活動では、その「歴史」になる以前の、時の積み重ねの真ただ中にいるという初めての感覚を味わった。できることならば、未来でのより正確な「歴史」ために全てのことを残したいところだが、私個人では能力的にも現実的にも不可能なことが多すぎる。この「残せない」ことの膨大さを常々痛感している。そのことにも配慮しつつ、子どもたちの未来はどうあるべきか、多分野の識者による研究が進むことを期待したい。そして何よりも、原発震災被災者の皆さまの生活がより改善され、安心して子どもを育てられる環境になることを切に願っている。栃木避難者母の会のメンバーの方がよく言われる「長生きして、みんなで福島第一原発の廃炉を見よう」という言葉の通り、その日が来ることを皆さんと共に待ち続けていきたい。